Bulletin 2016 11

COLONNADE

特集1●アーキテクツ・ガーデン2016建築祭

市民と共にある建築月間、『アーキテクツ・ガーデン2016』 2
—建築家はともだち—
講演会・シンポジウム 2
展示・ワークショップ 5
まち歩き・見学会 5
開催プログラム一覧 9

FORUM

海外レポート

福建土楼 客家の集合住宅について 10
安部裕光

温故知新

頭の中で望む、話す いつかは行ってみたいなあ 12
竹内裕二 JJ DESIGN

抱負を語る その場所と繋がる建築 13
住谷 覚 三菱地所設計

抱負を語る 都市から住まいへ 住まいから都市へ 13
今井智子 キュービック・ステーション一級建築士事務所

委員会活動報告

〈建築相談委員会〉首都圏建築相談室 今の活動状況 14
小島孝豊 IK都市・建築企画研究所

〈交流委員会〉交流委員会Bグループの活動 軽井沢セミナー報告 15
甲木豊秀 大日化成

〈保存問題委員会〉23地域会のタカラもの 16
北村紀史 魁綜合設計事務所

〈JIAトーク実行委員会〉2016年度第1回JIAトークの報告 17
高橋マサル Swing Design

部会活動報告

〈金曜の会〉今年度の企画 18
日高敏郎 日高敏郎建築設計事務所

〈デザイン部会〉今、価値を持ちうるアート・建築表現のベクトル 19
山本想太郎 山本想太郎設計アトリエ

地域会だより

〈新潟地域会〉新潟地域会の活動について 20
小川峰夫 アーキセッション

〈中野地域会〉ピンチをチャンスに ねばり強く 21
白江龍三 白江建築研究所

日本版CABEを考える

第三者性という文化 —CABE導入と日本— 22
長島孝一 エー・ユー・アール・建築・都市・研究コンサルタント

BACKYARD

広報からのお知らせ 23

JIA 公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部

vol. 266

報 告

アーキテクツ・ガーデン 2016 建築祭

市民と共にある建築月間、『アーキテクツ・ガーデン2016』
—建築家はともだち—

開催期間：2016年6月、およびその前後数日

JIA関東甲信越支部が、建築家やJIAの多彩な活動を広く一般市民に対して情報発信することを目的に長年開催しているアーキテクツ・ガーデン。2016年のテーマは「建築家はともだち」。6月を中心とした1ヵ月間に、“建築家が街に出て、市民と共に活動すること”を意識しながら、趣旨、意向、特色が違うさまざまなイベントが開催されました。

講演会・シンポジウム

●環境委員会

車座セミナー

これからの土壁の家 —現代人にとっての、住まい・まちなみを考える—

湯浅 剛

5月29日㈰　15：00～17：30　JIA館1階・建築家クラブ
講師：高橋昌巳／遠野未来／山田貴宏／安井 昇（建築家）
シンポジウム・モデレーター：中村謙太郎（編集者）
パネリスト：日高 保／伊藤 寛／林 美樹／高橋昌巳／遠野未来／安井 昇／山田貴宏
進行：湯浅 剛／寺尾信子／横山慎司（環境委員会）
主催：まちなかで土壁の家をふやす会＋支部・環境委員会

多くの参加者で熱気あふれる会場風景

前半のセミナーでは、まず高橋昌巳氏と遠野未来氏から「まちなかで土壁の家をふやす会」の活動や実例を通して「土壁」によるこれからの住まいとまちなみについて。次に山田貴宏氏から「土壁の家の温熱性能」について。最後に安井昇氏から「土壁の家の防火性能」についてお話をしていただきました。

後半はモデレーターの中村謙太郎氏を中心に車座シンポジウムを開催。中村さんから日本の土壁の歴史について話していただいた後、環境委員会メンバーの質問も交えながら、土壁のもつさまざまな魅力やデザイン、新たな暮らしやまちづくりの提案、コストや左官職の課題など、パネリストによる活発な意見交換が行われました。61名もの方に参加いただき、盛況なシンポジウムとなりました。参加者には「土壁」が身近なものと感じられる良い機会になったのではないでしょうか。

●目黒地域会

目黒地域会 第5回 街かどトーク

青木区長が語る目黒の街づくり

木村丈夫

6月1日㈬　18：00～　建築家会館本館1階ホール

区政を語る青木区長

第5回「街かどトーク」はアーキテクツガーデン参加プログラムとして青木英二目黒区長を迎え、「区長が語る目黒の街づくり」と題し、建築家会館1階大ホールにて行われた。講演内容はあらかじめ地域会がお願いした①「安心、安全な街づくり」②「今後の区有施設の在り方」③「減少しつつある民有地の緑化対策」④「建築4団体との防災協定の今後の在り方」⑤「目黒区景観条例、景観大賞の創設」の5つのテーマでお話しいただいた。

①に関しては低層街並の推進や木密地域不燃化進捗状況。②は年間200億の区の財政負担を軽減させていくために、効率の良い建築の複合化や民間委託を視野に改善を図りたい。③は緑比率を現状の17%から20%へ引き上げることを目標とした。ポケットパーク等の用地も確保したいが、用地不足で難航している。⑤については、他区の例も挙げられ、区が景観の優劣を決めることへの懸念を話されたが、地域会としては景観アドバイザー制度の認知度を上げ、区民の共感を得ることができれば、区民参加型の景観大賞創設ができるのではないかと考えている。

参加者一同との記念撮影

アーキテクツ・ガーデン 2016 建築祭

●住宅部会

JIA建築家と考える暮らしと住まい「住宅のコストをデザインする」

—長く住み続けるためのコストとクオリティ—

郡山 毅

6月11日㈯　11：00～12：30　リビングデザインセンター OZONE 6階
コーディネーター・講師：郡山 毅、大川直治

関東甲信越支部住宅部会では、公正・中立の立場から一般の方々へ暮らしと住まいに関するセミナーを開催しています。1995年の阪神･淡路大震災を機に始まったこの活動は、すでに20年を超え、現在も毎月2回開催しています。

建築家個人や作品紹介を目的としていないこの活動は、住宅部会内に「市民住宅講座WG」を設け、建築家の職能に照らし住宅部会として発信するメッセージと内容を、コーディネーターと講師陣が協議しながら運営しています。

6月11日のアーキテクツ・ガーデンで開催したシンポジウムは、「住宅のコストをデザインする」をテーマに、コストとクオリティーの視点から長く住み続ける住まいについて取り上げました。耐用年数と寿命、建替えサイクル。LCCとトータルコスト。コストによる制約に馴染むものと馴染まないもの等。講師役の大川直治会員と共に参加者とのディスカッションも交えて行われました。

講師、コーディネーターによるセミナー風景

講師：大川直治会員

●長野地域会

環境セミナー 信州 “準寒冷地温熱教室2016”

地域の特性を生かすパッシブデザインの10のステップ

山口康憲

平成25年省エネ法（改正省エネ法）により300㎡以上の建築には省エネルギー措置に関する届け出が義務化され、長野県では300㎡以下の住宅新築も含め長野県地球温暖化対策条例に係わる書面の提出が求められています。

ソフトの入力項目にそった届出書類を作成し、出力される住宅の性能値のみならず、地域の環境に基づいた居心地の良さや、快適さ等の肌感覚で表現される気持ちの良い住まいづくりの考え方を学ぶため、辻充孝先生をお招きし全6回のセミナーを開催しています。

講師の辻充孝先生

※勉強会のはじめに「地域材利用の今」として最新の地域材利用のミニセミナーや、午前の時間を利用した塩尻周辺のまちあるき等も行います。
※カリキュラムは準寒冷地の温熱設計技術の基本が身につく内容としてテーマを組み立てる。毎回宿題を提出することにより参加者に便利なツールが直接送られます。

第1回　6月18日㈯

ステップ1　「自分の家づくりの原則は」
ステップ2　「気候特性を読む」
ステップ3　「地域環境を読む」
ステップ4　「暮らし方を読む」
ステップ5　「プランニングを行う（即日設計）」

第1回セミナー

●スケジュール

第2回	7月16日㈯	ステップ6	「躯体性能をデザインする①」 温熱性能の基本、断熱性能の効果、目標性能の決め方、断熱性能の計算
第3回	8月 6日㈯	ステップ6	「躯体性能をデザインする②」 防露設計に計算、気密性能の重要性
第4回	9月 3日㈯	ステップ6	「躯体性能をデザインする③」 パッシブ計算のキモ、日射熱制御の効果
第5回	10月 1日㈯	ステップ7	「エネルギー性能をデザインする」 設備仕様の検討
		ステップ8	「シミュレーションを行う」 一次エネルギー計算を使う
第6回	11月 5日㈯	ステップ9	「環境性能を実測する」
		ステップ10	「総合的に考える」 断熱、エネルギー以外の性能設計、地域素材の選定

アーキテクツ・ガーデン 2016 建築祭

●建築相談委員会

建築家が取り組む建築相談

建築相談の支援制度・同潤会上野下アパートメントの建替え

高塚博志

6月18日㈯　13：30～16：00　AGC studio（旭硝子ショールーム2階）

当日のセミナーの様子

はじめに、セミナーを開催した今年の水無月は文字通りの空梅雨で、夏の首都圏水不足が心配されます。この文が掲載される頃には、水不足と熊本地震被災が治まっていることを祈念します。

さて、相談委員会主催の今回セミナーの主題は、「消費者が抱える建築紛争と紛争解決の支援制度」、「同潤会上野下アパートメントの建替えを語る」というテーマで、東京都消費生活総合センターの池田様、住宅リフォーム・紛争処理支援センターの青木様、および、元同潤会上野下アパートメント建替え組合理事長様と建替コンサルタントという多彩な顔ぶれの講師の皆様により、大変に充実したセミナーとなりました。

池田様と青木様には、相談業務の概要や相談事例を紹介いただき大変に参考になりました。組合理事長様と建替コンサルタントの皆様からは、マンションの建替えの困難さについてお話しいただき、参加者の皆さんにとっても今後の仕事等で貴重な参考になると確信しました。

講師の方々も含めて56名の方に参加いただきました。講師の皆様まことにありがとうございました。また、この場をお借りして、セミナー開催にご協力いただきました、AGC studio様はじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

●杉並地域会

JIA杉並土曜学校

杉並・空き家・空き地活用フォーラム

中村雅子

6月18日㈯　14：00～17：00　細田工務店（阿佐ヶ谷）

まちの不動産やさんから、空き家活用のオーナー、NPOで活躍されているコミュニティーを重視した賃貸型集合住宅の住人、空き家のリノベーション設計者とさまざまな方々の多くの話を聞いて、フリートークの時間も設けた新しい企画となりました。

参加者は約40名、次回も空き家・空き地をキーワードに待機児童と絡めての企画としています。

5人のパネラーが15分ずつ空き地・空き家の利活用の事例を紹介

その後円くなってフリートーク

●住宅部会

SUMAIセミナー PART23

デザイン力が住宅を変える

片倉隆幸

6月25日㈯　13：00～15：00　LIXILショールーム東京7階イベントルーム

今年度住宅部会は、建築家の職能を真正面から捉え、建築家の本質、理念をわかりやすく市民に伝えていこう、暮らしから考えたらこんなデザインができる、家にとってデザインとは何か？デザイン力が暮らしを変える、というテーマにてセミナーを進めています。

周辺環境から文化を読み解き、敷地の特殊性、通風、採光、家族の居場所、温熱環境、コストも含めて広義の意味でのデザイン力が住宅を変えるという内容をコーディネーター役の僕が進行。その後、周辺環境から考えるデザイン、家族の居場所をデザインするという内容についてスライドを交えて、部会の高橋さんと関本さんを講師に、3人のディスカッションにより「真の温かさを感じていける住まいを求めて、建築家は施主の暮らし向きと文化もデザインしていく」という話をさせていただきました。

会場の皆さんからの質問もいただき、建築家のデザイン力が暮らしを変えるという本質的なセミナーができたかと思います。

アーキテクツ・ガーデン 2016 建築祭

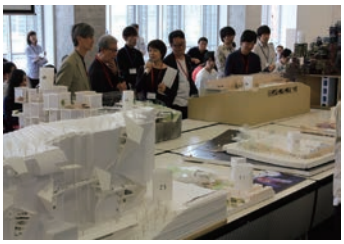
展示・ワークショップ

●学生デザイン実行委員会

第25回JIA東京都学生卒業設計コンクール2016

杉山英知

5月28日㈯、29日㈰　芝浦工業大学 芝浦キャンパス8階



審査風景

2016年5月28日、芝浦工業大学 芝浦キャンパス8階を会場に第25回JIA東京都学生卒業設計コンクール2016が開催されました。今年は東京都内にある20大学から46作品の推薦を受け、辞退作品1作品を除く45作品を審査対象に公開にて審査が行われました。

受賞者・審査委員 集合写真

今回の審査には審査委員長に山本理顕氏、副審査委員長に三谷徹氏、審査委員に城戸崎和佐氏、山代悟氏、末光弘和氏にお願いし、さまざまな視点からの講評をいただきました。来場者も総数で200名近くにのぼり、たくさんの方に学生の今をお伝えすることができたと思っております。

●ミケランジェロ会

新宿駅西口プロムナード・ギャラリー展

阿部一尋

6月4日㈯～7月2日㈯　新宿西口プロムナード・ギャラリー

新宿駅西口を通る多くの方々が眼にできる場所が「新宿西口プロムナード・ギャラリー」です。通常は2週間の展示になりますが、今年は次回展示グループがなかったので4週間の展示となりました。

ここに　JIA関東甲信越支部部会の「ミケランジェロ会」が絵画（水彩、油彩）、写真、書等の展示を行い、建築家協会をアピールしました。

搬入後の講評会

皇居スケッチ会後の反省会

今年は18会員が56作品を展示しました。国内・海外の風景画が最も多く出品されました。昨年秋のスケッチ会では寅さんで有名な葛飾区の柴又を訪ねて柴又帝釈天などのスケッチを行い、今春には皇居の東御苑で桃華楽堂（今井兼次設計）などを題材にしてスケッチしました。

まち歩き・見学会

●城南地域会

第13回　城南散歩

大森海岸から品川宿までの旧海岸線を辿って

木村年男

6月4日㈯　13：30～17：00　　参加者：9名

街道が祭りの舞台に

これまで城南散歩は4本の河川、崖線、運河、延焼遮断帯計画道路等が実施され、どちらも興味深く地域の地勢を感じる上で大きなインパクトがありました。これによる認識は当地域会のまちづくりの活動に大いに参考となるところです。第5回フォーラムでも取り上げられた、当地域の地形が織りなす生活の多様性をさらに深掘りする機会になると考えて、城南散歩を企画しました。

今回、2016年度最初の城南散歩は昨年10月の「大森海岸から羽田まで」に続く旧海岸線第2弾です。城南地域では大森を境に北側へ続く地形は急激に台地と海岸線が狭まってきているところで江戸城へ向けて旅立ちます。東海道第一番目の宿と言われるものの、江戸中心部からも近く大名屋敷や寺社仏閣も多く歴史の名残を多く残す場所です。

一般の参加者を含め9名による踏破となり、行程はほぼ当初の予定通り、大森海岸駅 → 品川区民公園 →森が崎（旧処刑場跡）→（旧東海道を北上します）→ 立会川→（京浜運河）→ 鮫洲 → 青物横丁→ 旧品川宿商店街…全行程約4.2km となりました。

アーキテクツ・ガーデン 2016 建築祭

●中野地域会

中野まちあるき

東中野～青梅街道 史跡めぐり

小西敏正

6月4日㈯　13：00～16：00　　参加者：7名

中野地域会では、アーキテクツ・ガーデンの一環として、一般の人にも声を掛け、6月4日に「中野まちあるき」を開催。東中野駅を起点に、山手通りを南に下り、中野氷川神社で宮司さんの解説を聞き、江戸名所図會にも出ている旧宝仙寺三重の塔（寛永年間に建築、戦災で焼失）の石碑などを見学したあと白玉稲荷神社を西に入り、旧中野町役場跡や山政醤油醸造所の煉瓦塀など中野坂上の史跡を訪ねた。さらに、油又（あぶまた）味噌醸造所の近くで青梅街道に出て西に歩き、慈眼寺、鍋屋横丁の繁栄の跡などを見て歩く。さらに杉山公園から南へ十貫坂上を経て、洋館西片邸（大正10年築）、阿波屋呉服店、五柱五成（ごしゃいなり）神社を見て解散。

青梅街道沿いのこのエリアは、鉄道が開通するまで、中野の産業の中心地であり、特に鍋屋横丁は杉並の妙法寺参道の起点として、また、井草・鷺宮からの農産物の運搬道の分岐点として賑わった場所であったことが再認識された。普段何気なく目にしている街の各処の歴史が紐解かれ、かつての中野の繁栄の地を偲ぶ街歩きとなった。

かつて鍋屋横丁の追分にあった慈眼寺の馬頭観音

山政醤油醸造所煉瓦塀

●住宅部会

市民住宅講座2016「街」にでて考えよう、住まいと暮らし第13回

「目白・池袋」に近代化の足跡を探す

大塚雄二

6月4日㈯　14：00～18：00　　参加者：一般20名

関東甲信越支部住宅部会では、市民住宅講座として、一般の方々を対象とした「まち歩き」を年2回行っています。コース設定のための下見に数回出かけ、関連した資料収集をメンバーで手分けして、当日の配布資料を作成しています。

前回は、明治初期に「西洋文明」を取り入れ、その後の日本の発展に多大な影響を与えた外国人居留地の「築地」でした。

今回は、江戸時代に郊外地だった「目白・池袋界隈」がコースで、大正から昭和の初期に「近代化」していく足跡を探す「まち歩き」でした。都心と郊外地の2つのエリアは、どのように時代のつながりを感じさせてくれたか。一般参加者へのまち歩きのサポートを行い、まち歩きの楽しさ、時代と社会が密接に都市と建築に関係し、その集積がまちの魅力になっていることを、参加者とともに共有した「まち歩き」でした。

自由学園明日館

旧学習院昭和寮（日立目白クラブ）

●建築家写真倶楽部

写真家中川道夫氏とめぐる横浜の隠れた歴史撮り歩き

—水の中の都市、横浜「関外」旧吉田新田エリアを巡る—

藤本幸充

6月18日㈯　13：00～17：00　　参加者：15名（JIA5名、その他は一般の参加者）

前回の中川氏の講演に続き、今回は外に出て、氏とともに横浜「関外」—横浜の「関内」駅の南側に広がるエリアを巡った。

以前は入海でそこを江戸時代、埋め立てたのが吉田新田。明治期にはその水田も埋め、都市化が進み商業地として栄えたが、関内から移った遊郭もあり、戦後は売春や麻薬、外国人風俗のエリアが点在した。時代を経て、現在はアートを中心にした環境改善の街づくりが行われている。埋め立て時からある大岡川沿いの一間間口の連続長屋や、緊張のあまり思わずカメラを隠して通りたくなるディープな界隈が今でもある。戦時中は爆撃から逃れるためのガード下が売春宿となり、現在は撤去されてコンクリート打放し、そしてリン酸処理亜鉛メッキの外壁などモダンな建物が挿入されている。

中川氏は世界の歴史的都市が変化してゆく風景を追い続けているが、参加者も今回、氏の世界にたっぷり浸っていた。

中区初音町付近、昭和の旅館

南区八幡町伊藤米店前にて記念撮影

アーキテクツ・ガーデン 2016 建築祭

●渋谷地域会

渋谷駅の記憶シリーズ3

桜丘地区変貌直前トレッキング

柳田英一

6月18日㈯　14：00～17：00　　参加者：18名

桜丘地区の 13m の高低差を見る

渋谷地域会ではめまぐるしく変化する渋谷駅周辺再開発に注目し「渋谷駅の記憶」というテーマで解体寸前の地区を街歩きし、記憶に留める試みをしている。

今回のテーマ地区は「渋谷駅桜丘地区」で、当地区市街地再開発組合の理事でエリアマネージャーの田中要市氏の解説を受けながら渋谷ヒカリエにある再開発完成模型前からスタートし、工事中の道玄坂地区、南街区をまわり、FMステーションの渋谷ラジオスタジオに乱入？桜丘地区内に入り、昭和初期に建てられたアパート見学、街区を丹念に見て回り、大和田の文化センターのカフェに到着休憩、レクチャーがあり解散という日程であった。

ヒカリエ 11 階の渋谷駅周辺再開発模型前でスタート前の集合写真

桜丘地区は企業や自治体主体の渋谷駅再開発の他地区とは異なり60程度の一般地権者をかかえ、その開発プロセスや13mの土地の高低差をカバーした建築計画などみどころ満載である。プロジェクトは解体直前の秒読みに入った段階で、ライブ感あふれるイベントは参加人数18名、猛暑の中のツアーとなった。

●千代田地域会、新宿地域会

市ヶ谷・富士見・神楽坂

外濠をめぐる凸凹探検まち歩き

市川達夫

6月25日㈯　13：30～17：30　　参加者：21名

法政大学市谷田町キャンパスで座学

6月25日㈯の午後、江戸城の外濠をはさんで隣接する千代田地域会と新宿地域会が、はじめての協働企画イベントとして、市民の参加によるまち歩きを実施しました。「外濠」は、両地域会にとって懸案のテーマです。江戸期からの豊かな水辺空間が残された貴重な環境を継承し、どう活かしていくか、また、外濠周辺の起伏に富んだ地形の上に、先人たちはどのように都市空間を展開し、使いこなしてきたか。共に歩いて観察を共有するまち歩きです。

まず、法政大学市谷田町キャンパス・マルチメディアホールで、新宿区文化観光課学芸員の北見恭一氏と法政大学エコ地域デザイン研究センター兼任研究員・高道昌志氏の講義で、外濠をめぐる空間の歴史的な成り立ちを頭に入れた後、2時間余りの都市観察に、両地域会の会員その他の建築家、学生、一般市民、総勢21名で出かけました。

外壕公園の土手にて

外堀通り沿いを市ヶ谷見附橋まで辿り、橋を渡って反転、外濠公園の土手伝いに新見附橋へ、まずは外濠と道路・鉄道敷きによって広々と展開する「表」を観察します。続いて、法政大学市ヶ谷校舎の裏手、富士見坂から千代田区の「裏」の坂道の探索ルートを歩きます。続いて、牛込見附橋を渡って新宿側へ。神楽坂の人混みを抜けて東京理科大学神楽坂地域デザインラボに立ち寄り、伊藤スタジオの学生諸君の「牛込御門の復原設計と周辺環境の再構築計画」をはじめ、外濠、神楽坂等に関する提案の模型展示を、製作者の学生の説明付きで拝見。最後は、新宿区の市ヶ谷高台の諸町の「裏」道を経て、再び市谷田町のキャンパスへ。

神楽坂２丁目路地裏の坂道

予定を大幅に過ぎて帰還したため、「まとめ」のディスカッションは割愛することになりましたが、散会後の有志による親睦会では、意外性のある地形に各自多くの再発見があったこと、適切な解説があったおかげで、景観の歴史性への理解ができたことなどが語られ、実りの多いまち歩きであったと振り返ることができました。今後の両地域会の連携への確かな手掛かりとなる意見交換もできました。

東京理科大学 神楽坂地域デザインラボで

共催に加わり、講演会場などの便宜を図ってくださった福井恒明教授・高道昌志研究員ほかの法政大学エコ地域デザイン研究センターの皆様、土曜日にかかわらず開場してくださり、総出で温かく迎えてくださった宇野求教授・伊藤裕久教授ほか、東京理科大学神楽坂地域デザインラボの皆様、そして新宿区の北見恭一学芸員にお礼を申し上げます。

アーキテクツ・ガーデン 2016 建築祭

●世田谷地域会

世田谷の地域風景資産を歩く

青野達司

7月3日㈰　10：00～16：00　世田谷区成城～瀬田
参加者：39名

成城３丁目緑地

世田谷区には景観法に基づく風景づくり条例があり世田谷区独自の活動をしています。その一つは景観ではなく風景という言葉を使い、景観が人間の営みであるということを表現しています。もう一つは区民との協働で、風景の保全に関していくつかのことが挙げられますが、その中で大切にしたい風景を構成する地域風景資産というものを区民の推薦で選定し、それを守り、育て、つくることを風景づくりという言葉で定義しています。地域風景資産の選定は平成14年度に始まり、3回の選定を経て現在86が選定されています。世田谷地域会では本年度のアーキテクツ・ガーデンにおいて、そのうち15の地域風景資産を、活動団体のご案内で体験する街歩きを計画しました。

畑の間の土の道

慶元寺三重塔の見える風景

成城の近代住宅

7月3日㈰は梅雨の中晴れで気温も高く、決して街歩きにふさわしい天候ではありませんでしたが合計39名の参加がありました。内訳は一般14名、JIA15名、区2名、活動団体解説者8名というものです。参加の皆様お疲れさまでした。

●栃木地域会

大谷石のまちなみ見学会

佐藤公紀

7月23日㈯　9：30～15：30　宇都宮市の北部に点在する大谷石の集落
参加者：14名

集合写真

今回は、JIA会員が参加して活動しているNPO法人大谷石研究会と宇都宮大学安森研究室が調査を行った大谷石の集落を訪ねました。

見学会当日である7月23日の参加者は一般5名（うち小学生1名）会員7名解説者として集落調査に携わった宇都宮大学の大学院生2名の総勢14名による見学会でした。単体としての大谷石建築は大谷地区や市内にいくつも点在していますが、群としての大谷石建築は市内にはなく、宇都宮の西部と北部にあります。調査を行ったいくつかの集落のうち、今回は北部にある集落密度の高い芦沼集落と、用水路と石塀が美しい上田集落を中心に見学を行いました。

芦沼集落は幅5mの道の両側に高さ5mの作業蔵が立ち並び、そこはまるでイタリアの田舎を思わせる風景でした。上田集落は道の両側に用水路が走り、水路際には大谷石の塀が続き、とてもゆったりとした気分にさせる風景でした。

単体の大谷石建築しか知らない見学者にとって初めて見る集落の風景はとても新鮮だったようで、調査を行った担当者の解説を直接聞くことで、大谷石集落の特徴などについてよく理解できたようです。

集落見学の後は北部に位置する大谷石蔵を利用した個人美術館である「和気史郎記念館」を訪れました。故和気史郎は幽玄の世界を得意とする洋画家です。

芦沼集落

上田集落

かつて肥料商を営んでいた生家の石蔵が素朴で素敵な展示空間となっています。参加した小学生は大谷石を夏休み研究のテーマにするそうです。きっと大学生に負けない内容になると思います。帰り道立ち寄った酒蔵で地酒を土産にして帰路につきました。暑い日でしたがとても有意義な1日でした。

アーキテクツ・ガーデン 2016 建築祭

アーキテクツ・ガーデン 2016 建築祭

開催プログラム

講演会・シンポジウム

■ 車座セミナー
「これからの土壁の家」—現代人にとっての、住まい･まちなみを考える—
5月29日（日）
場所： JIA館1階 建築家クラブ
主催： 環境委員会＋まちなかで土壁の家をふやす会

■ 目黒地域会 第5回街かどトーク
「青木区長が語る目黒の街づくり」
6月1日（水）
場所： 建築家会館本館1階ホール
主催： 目黒地域会

■ JIA建築家と考える暮らしと住まい
「住宅のコストをデザインする」
—長く住み続けるためのコストとクオリティ—
6月11日（土）
場所： リビングデザインセンター OZONE6階
主催： 住宅部会

■ 環境セミナー 信州“準寒冷地温熱教室2016”
地域の特性を生かすパッシブデザインの10のステップ 第1回
6月18日（土）
場所： 塩尻市総合文化センター
主催： 長野地域会

■ 建築家が取り組む建築相談
第1部：消費者が抱える建築紛争と紛争解決の支援制度
第2部：最後の同潤会・上野下アパートメントの建替えを語る
6月18日（土）
場所： AGC studio（旭硝子ショールーム2階）
主催： 建築相談委員会

■ JIA杉並土曜学校
「杉並・空き家・空き地活用フォーラム」
6月18日（土）
場所： 細田工務店（阿佐ヶ谷）
主催： 杉並地域会

■ シンポジウム
「まち＋アーチスト＋建築家」
6月22日（水）
場所： JIA館1階 建築家クラブ
主催： デザイン部会

■ SUMAIセミナー PART23
「デザイン力が住宅を変える」
6月25日（土）
場所： LIXILショールーム東京7階イベントルーム
主催： 住宅部会

展示・ワークショップ

■ **第25回JIA東京都学生卒業設計コンクール2016**
公開審査・講評・表彰　5月28日（土）
作品展示　5月28日（土）、5月29日（日）
場所： 芝浦工業大学 芝浦キャンパス 8階
主催： 学生デザイン実行委員会

■ **新宿駅西口プロムナード・ギャラリー展**
6月4日（土）～7月2日（土）
場所： 新宿駅西口広場
主催： ミケランジェロ会

街歩き・見学会

■ 第13回城南散歩
大森海岸から品川宿までの旧海岸線を辿って
6月4日（土）
場所： 大森海岸駅—京急北品川駅間
主催： 城南地域会／城南・風景とまちづくりクラブ

■ 中野まちあるき
東中野～青梅街道 史跡めぐり
6月4日（土）
場所： 東中野駅から青梅街道沿いの散策
主催： 中野地域会

■ 市民住宅講座2016「街」にでて考えよう、住まいと暮らし第13回
「目白・池袋」に近代化の足跡を探す
6月4日（土）
場所： 目白駅—池袋駅間
主催： 住宅部会

■ **写真家中川道夫氏とめぐる横浜の隠れた歴史撮り歩き**
—水の中の都市—横浜「関外」旧吉田新田エリアをめぐる—
6月18日（土）
場所： 横浜 関外
主催： 建築家写真倶楽部

■ 渋谷駅の記憶シリーズ3
桜丘地区変貌直前トレッキング
6月18日（土）
場所：渋谷駅桜丘地区
主催：渋谷地域会

■ 千代田地域会・新宿地域会協働企画
市ヶ谷・富士見・神楽坂 **外濠をめぐる凸凹探検まち歩き**
6月25日（土）
場所： 外濠をはさんで、千代田区・新宿区両側の地形を体感するコース
主催： 千代田地域会、新宿地域会、法政大学エコ地域デザイン研究センター

■ **世田谷の地域風景資産を歩く**
7月3日（日）
場所： 世田谷区成城～瀬田
主催： 世田谷地域会

■ **大谷石のまちなみ見学会**
7月23日（土）
場所：宇都宮市の北部に点在する大谷石の集落
主催：栃木地域会

相談会

■ **JIA関東甲信越支部 建築相談室「無料建築相談会」**
6月18日（土）
場所： AGC studio（旭硝子ショールーム2階）
主催： 建築相談委員会

●アーキテクツ・ガーデンの会期中に、第1回JIA関東甲信越支部大会が群馬県で開催されました。

建築祭2016群馬（支部大会）

ここにあるタカラもの —建築の七転び八起き—
開催： 2016年6月10日（金）～12日（日）
場所： 前橋、高崎
※詳細は『Bulletin』265号（9月号）をご覧ください。

福建土楼
～客家の集合住宅について～

安部裕光

中国で住宅設計の仕事に携る中、暮らしの歴史について調べていて、この奇妙な建物に出会った。無数の宇宙船が突然、山の中に降り立ったかのようなとてもインパクトのある外観で、内部でどのような暮らしが行われていたのかを知りたくなり、この夏、福建省の山奥にある福建土楼を訪れた。

まず「客家（はっか）」とは何か。「客家」は黄河中流・下流に居住していた客家語を言語とする漢民族のことで、戦争や歴史的要因によって4世紀～19世紀にかけて5回の大規模な南下を行い、四川・福建・広東・海南などに定住した。「客家」という呼び名は、後から移り住んで新しく取得した戸籍が「客」と呼ばれたことに由来する。客家人は勤勉で相互に助け合う精神が強い。一方、どの地でもよそ者扱いされてきた苦い経験から、外部の人間の意見をあまり受け入れないという一面もある。世界の客家人は1億人以上いて、華僑として活躍している東南アジア人にも客家出身者が多く「東方のユダヤ人」とも言われている。

その客家の住居が「客家土楼」と言われ、北方の四合院と同じく、外に閉じ内に開く概念を持っている。敵からの防衛目的も強いため、厚い壁で覆われ、入り口は一つ、窓も2階以上の階に最小限の換気用の窓しかついていない。規模は直径30mから大きい物は70mを超えるものもあり300人以上が生活する場となっている（写真1）。四合院に近い群体住居に始まり、円形や楕円の環形土楼や四角の方形土楼、山の中腹に建つ斜面土楼などさまざまなタイプがある。

写真1　塔下村の土楼

外壁は土壁だが、外壁以外は全て木造で作られていて、内部で廊下が一周している。階段は規模にもよるが2～4カ所の場合が多い。1階は厨房、2階は倉庫、3階以上に寝室が配置され各部屋とも共用の階段よりアクセスする動線になっている。土楼にもよるが、中央の空洞部分に催時施設や客室、家畜舎などが配置されている。

全国には2万以上の土楼があると言われているが、多くが福建省の永定県および南靖県に集まっている。

今回、私は厦門市から新幹線と地元のバスを乗り継ぎ、最後はオートバイの後ろに跨って南靖県にある土楼群に到着した。方言の問題か発音が悪いのか、私の片言の中国語はほとんど通じず、到着するまでにかなり苦労したので、たどり着いた際の感動は一際大きかった。

初日は塔下村という小さな村で1泊して、近くにある土楼を歩いて見て回った。

最初に「内部でどのような暮らしが行われていたか」と書いたように、土楼自体は過去に使われていたもので現在は見学用のものと思っていたのだが、実際は全ての土楼が住居として普通に使われていた。最初に見た土楼は小規模のもので5世帯程の家族が暮らしているように見えた。1階回廊の数カ所にトタンの屋根がかかり、その下に配管むき出しのシンクとテーブルの上に載ったコンロ（良く見るとIH）が置かれていた。夕飯時ではあったが、おばあちゃん2人と女の子1人が作業をしていて他には人の気配が無かった。洗濯物は何カ所も干されていたので、住んではいると思うのだが、男性は働きに出ていたのかもしれない。

翌日、知り合いになったバイクの運転手に迎えに来て貰い、複数の土楼を見て回った。福建土楼の故里である南靖県は「土楼の王国」と称されていて、中でも「裕昌楼」と「田螺杭土楼群」は世界遺産の紹介写真の中でもたびたび登場する最も有名な土楼に挙げられる。

「裕昌楼」は14世紀末に建てられた現存する福建土楼の中で最も古い土楼で別名「よろめきの楼」とも言われている。土楼竣工後、建物内部回廊の柱が傾きはじめて

写真２　裕昌楼

最大傾斜15度の部分もあり、見た所は崩壊寸前である。しかし600年以上の風雨と度重なる地震にも耐えて今もなお均衡を保っている。本来は7階建てだったが、瓦の施工時に火事があり、縁起が悪いので5階建てになったといういわくつきの土楼でもある。各階には54に等分配された部屋が並び、全て内側に開いている。明らかにいつ壊れても不思議でないこの建物に今も普通に暮らしているところが日本で暮らす自分には考えられないが、彼らにとっては代々受け継いできたこの建物を離れることは頭の片隅にも考えていないのではないかと、住民の笑顔を見て思った（写真2）。

「田螺杭土楼群」は山の中腹に建てられた5つの土楼群のことで、18世紀後半に建てられた比較的新しい建物で保存状態も比較的良い。山の上から見下ろすと方形・楕円・円形の形をした5棟の形がはっきりとわかり、各土楼の配置が絶妙なバランスを保っている。また土楼の周りには棚田が形成され、自然の風景としても非常に美しく、土楼は完全に溶け込んでいた（写真3）。

展望台からの景色を堪能した後、5つの土楼群の中に連れて行ってもらったのだが、そのうちの楕円土楼の中にバイクのおじさんの実家があった。ちょうど雨も降ってきて、雨宿りも兼ねてしばらく1階の食堂スペースで休憩をさせてもらった。この土楼群は黄一族が建てたもので、この中に住む人は全員黄さんで、もちろん運転手のおじさんも黄さんだった。4帖半程の狭い空間に食堂・洗濯室があり、キッチンは前日に見た土楼と同じく廊下に出ている。ここに住むお母さんは一人暮らしで、当然エレベーターなどない中、寝室のある3階まで毎日階段で昇り降りをしているという。大変だと思うが、住んでいる人達にとってはごく自然で、逆に適度に身体を動かすことで健康で長生きしているように思えた。一つ屋根の下に住んでいる大家族としての連帯感もあるのだろう。ただ、若者が減っているのは間違いなく、この文化が今後いつまで続くのか、少し寂しい気持ちにもなった。

複数の実際に生活する土楼群を見て回っていて、ふと日本でも昨今普及しつつあるシェアハウスの住まい方に似ていると感じた。個人の寝室を最小限確保して、その他の機能は共用とする。特に厨房については中庭を囲むように廊下に張り出し配置され、隣の家族同士でコミュニケーションを取りながら食事をつくり、会話を楽しむ。住宅の機能を分割して共有の豊かな空間をシェアするスタイルは、何百年も前にすでに確立したスタイルだったのではないだろうか？ただ、家族の連帯を大事にして暮らしてきた客家人と人間関係が希薄になりつつある現在の日本では背景が全く異なるので、それぞれの文化に適した空間提案が必要であることは言うまでもない（写真4）。

今回の旅で、現地を訪れそこに住む人達と直接触れ合うことが、その建築の背景を理解するために重要であることを再認識できた。また、その場所に辿り着くまでの大変さと旅の充実感が比例することを改めて実感した。今後も世界各国の集落を訪ねて自分自身の財産にしたいと思う。

（左）写真３　田螺杭土楼群
（右）写真４　１階廊下の厨房

頭の中で望む、話す

いつかは行ってみたいなあ

竹内裕二

小学生の頃、夕焼けになると、きまって自宅の屋根に登っていた。数えきれない程の色の種類、赤とオレンジ、あかね色を帯びた雲が刻一刻と音もなく色形を変えていく。いつも、うっとりと眺めていた。時間にすると3分にも満たない。あっという間に終わってしまう。余韻は残るのだが、わくわくしている心持ちも数分で終わってしまう。若狭湾一帯の夕焼けは本当に素晴らしい天空のドラマを演出する。夕焼けになる日の数も多い。東京でも時折、きれいな夕焼けを見ることがある。しかし、その日数が少ない。都心のビルに挟まれたビルの一室、仕事場に籠っていることにもよるのだろう。実は、雷と虹を見るのも大好きなのだが、虹は、あまり見かけなくなった。雷は、ビルの隙間から凄まじい落雷の音と光、大雨を楽しむことができる。

小説を読むと、主人公が海をじっと見つめている情景がよく出てくる。子供の頃、海は泳ぎ潜るところで、眺めるものではなかった。水中眼鏡で竜の落とし子を見つけ、両手で捕まえようとすると驚く程の速さで逃げてしまう。そういった遊び場が海だった。年を重ねるに従って、海を眺めるのはいいものだと思うようになってきた。今も夕焼けや虹を見るのは好きなのだが、設計の仕事をするようになってから、イタリアの古い街並みを見るのが好きになってきた。それが嵩じて今度は修道院の回廊に興味を持つようになった。

イタリアを中心にひとりでヨーロッパを飛び回っていた。気に入った建築に巡り会うと、その建物もしくは設計者に話しかけていた。質問をすることもある。すぐに返事が聞こえてくることもあったが、ずっとおし黙ったまま返事が来ないことの方が多かった。あたりまえだ。言葉の会話ではなく、伝わってくるということなのだ。一昨年、新築された銀座資生堂本社でル・トロネの写真展を開かせてもらった。多くの家協会の友人たちに来ていただき本当に感謝している。個展会場で朝吹正行さんにバッハの無伴奏組曲を弾いていただいた。トロネの回廊空間にこの曲はよく似合う。もちろん皆さまにワインも飲んでいただいた。修道院の回廊は同じような形態をした窓の連続なのだが、日によって、季節によって、時間によって、その空間、雰囲気がまるで違ったように見えてくる。学位論文のテーマであったことにもよるが、魅かれる源は果てしなき宇宙と人間の心の世界があるからだ。時の流れは過ぎてしまえば本当に速い。先を見つめて、これからああしよう、こうしようと思っていても、流れが速すぎて、その通りにはいかない。それが人生なのだろう。ああすれば良かった、こうすれば良かったと過ぎ去った時間を見つめてばかりではちょっと寂しいが、それはそれで良いのではないか。

初めて書いた建築家を主人公にした小説『時間（とき）に羽ばたく翼』もそれをテーマにした。その昔イタリアに行きたいなあと思ったのは、ポリやカルカータの写真を雑誌『みづゑ』で見た時、30歳になったばかりの頃だった。その後、それらの街をまとめた「都市住宅」別冊『イタリアの山岳都市・テベレ川流域』が発刊された。今も私の大切にしている書籍である。この本の衝撃は大きかった。表紙になったカルカータの街を見て、お金はないが「いつかは行ってみたいなあ」と見入っていた。今でこそイタリアつながりの友人ばかりとなったが、当時は、誰も知り合いがいなかった。

イタリア行きには、日本政府文化庁派遣芸術家在外研修員制度のお世話になった。ローマ大学建築学部ではコッラード・ボッツォーニ教授の「教会建築史」の授業を取った。温厚で人望のあるスケールの大きな方で生徒に一番人気の教授だった。年は過ぎたが今も興味津々、気持ちだけはひとつとして変わっていない。

Abbaye du Thoronet

抱負を語る

その場所と繋がる建築

住谷 覚

JIAへの入会は私自身の建築に対する思いや発想を改めて考える機会にもなりました。2000年に社会人として歩みだしてから「その場所と繋がる建築」について考えています。

10年前に第五期歌舞伎座の意匠を担当し、銀座木挽町に建設された先代の歌舞伎座と街との関係を分析しました。第一期から第四期までの歌舞伎座はどれも各時代に繋がったシンボルであり、先代のさまざまな要素を継承した劇場でした。第五期では第四期の錺(かざり)金物等の部材をできる限り保存再利用し、古材の持つ輝きを現代に伝えています。さらに、晴海通りと木挽町通りに開いた広場を新たにつくり、地下広場や屋上庭園・歌舞伎ギャラリーが街と繋がる平成の歌舞伎座としました。

柿落としの日に大賑わいの歌舞伎座に行くと、そこには華やかで新しくもあり、どこか懐かしい祝祭空間が復活していました。

建築家にはつくったものを通じて街との関わり方が見えてくる面白さ、そして社会に対する責任があると思います。JIAの諸先輩建築家との活動を通じてクライアントや街に貢献すべく、この意欲をさらに高めていきたいです。

抱負を語る

都市から住まいへ 住まいから都市へ

今井智子

大学卒業後、15年ほど鉄道会社に勤務し、10年20年30年という長いスパンでの将来構想や、駅づくり・街づくりを経験させていただいた。当時は、夢中になってそれらの仕事に取り組む一方、本当に実現するのだろうかと、半信半疑な自分もそこにいた。年月と共にやがてそれらは実現し、巨大な土木構造物や建築物ができ上がる姿をみると、当時の一本一本の線の重みと、大勢の仲間と携わった、ひとつひとつの仕事の積み重ねを深く感じている。

その後設計事務所として独立し、住宅の設計、リノベーションを手がけるようになり、最初はその求められる精度、スピードに応えていくことに精一杯であった。都心のマンションのリノベーションに数多く携わる中、最近やっと、それぞれのクライアントが求める生活像、言葉にできずとも何となく感じている都市生活への要求を汲み取れるようになってきたように思う。

都心の限られた空間の中でも、自分の欲求を個々に実現し、豊かに生活していくことを多くの人が求めている。個人的な都合、個人的な一空間へのこだわりに向き合っていく中で、かえってそのことが今の社会への問いかけへと繋がることを実感する毎日である。生活すること、働くこと、育てていくこと、学んでいくこと。それぞれの社会とのかかわりを、設計を通してどのように実現していくのか。都市から住まいへ。住まいから都市へ。その両方を行ったり来たりしながら設計に没頭する毎日である。

写真撮影：トータルオフィスパートナー　提供：松竹㈱、㈱歌舞伎座

I 邸

建築相談委員会

首都圏建築相談室 今の活動状況

首都圏建築相談室
室長
小島孝豊

首都圏建築相談室は現在31名で、ボランティアとして一般の方々向けに無料で建築の面談相談を都内3カ所で行っております。面談相談だけでは無理で、現地をみなければという場合には、有料になる制度も併せもっております。

わが国で住宅を取得する方法はさまざまです。私たちJIA会員のように設計事務所が設計監理した住宅は残念ながら多くありません。わが国では圧倒的に、専業者による設計監理方式でない方法で住宅が供給されております。2014年度全国住宅着工統計（国土交通省）によりますと、戸建てが全国で約50万戸供給されているなかで、ハウスメーカー上位10社が供給している戸建ては約32万戸（市場経済研究所「不動産経済・住宅データ ニュース」2015年7月27日）となっております。地場の工務店も含めたさまざまなハウスメーカーは自社の設計施工住宅、または建売住宅、そして条件付き住宅などとして住宅を供給しております。

建築相談を受けているわれわれJIA会員からみると、洋服を買うのにも店舗をいくつか探す手間をかけるように、一生に一度あるかないかという多額の費用の買い物にももっと手を掛ければ良いのにと思わせられることがたびたびです（われわれ設計専業者はもっと発奮してもらわなければなりませんが）。

建築相談をしているなかで、手薄な条件で住宅が出来上がっていくさまがみてとれます。筆者の個人的な印象ですが、欠陥相談の対象となる住宅として、ハウスメーカー物件での建売住宅・条件付き住宅の割合が多い傾向があります。

横浜の傾斜した分譲マンションの問題で日弁連会長が声明で指摘されましたが、わが国の建築生産システムの問題点「現行の建築士による工事監理制度が厳正に機能していない仕組み」が根底にあるように思います。それでも近年、欠陥住宅・欠陥リフォームの多発から品確法、消費者契約法などの法整備がなされてきました。品確法・瑕疵担保履行法の整備・運用によって、①「評価住宅」②「保険付き住宅」③「住宅リフォーム」については、住宅リフォーム・紛争処理支援センター（以後略称：支援センター）が電話相談を設けて、場合によっては弁護士・建築士の面談による「専門家相談」に、また場合によっては各都道府県にある住宅紛争審査会（弁護士会）でのあっせん・調停・仲裁に回したりしております。

首都圏建築相談室には、JIAに直接を申し込んでくるケース（JIA HPからメールでの申込が主体）以外に支援センター、各地の消費生活センターから紹介されての相談申し込みも多くあります。そのために、東京都消費生活総合センター、支援センターと連携を取りながら、JIAの特色を生かした相談を心掛けております。当相談室員には、上記「専門家相談」に登録された相談員、住宅紛争審査会に登録されている人、また各地裁（横浜地裁・東京地裁など）の民事調停員・専門委員の方々も多く所属しております。今後さらに地域と連携しながら、「社会に開かれた建築相談」を心掛けていきたいと考えております。

【JIA会員の皆さまへ】

わが国では、住宅が誕生している過程でわれわれのような設計監理を専業とする設計事務所が関与しない住宅が圧倒的に多いという実態があります。そのなかで、欠陥住宅以外にもさまざまなトラブルに見舞われているエンドユーザーが多くおられます。

首都圏建築相談室では、都内で月10回位の面談相談を実施しており、昨年度の相談件数は259件でした。

相談室ではただ今、新しい会員の参加を求めております。本来の事務所業務に少し時間をさいていただき、これまでの設計監理で培ってきた知識・知見を社会に還元しませんか。

交流委員会

交流委員会Bグループの活動 軽井沢セミナー報告

交流委員会
法人協力Bグループ
大日化成 東京支店
甲木豊秀

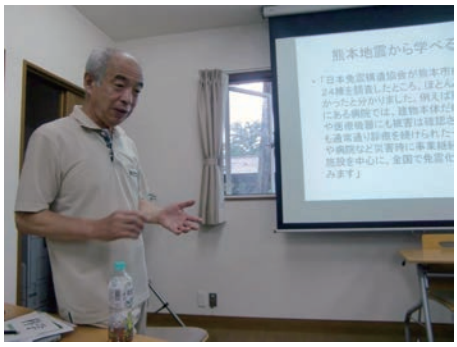
法人協力会員Bグループは、防水、塗料、左官、吹付材を扱う施工業者、メーカー、商社の15社で構成されています。今年度から、三菱地所設計の渡邉顕彦氏（前交流委員長）、梓設計の那須浩氏がBグループに来てくださいました。

主な活動としましては、まず夏季に軽井沢でセミナーを開催し、12月に建物見学会、そして機会があれば設計事務所でのセミナーなどを開催しています。

今年も8月5日、6日に軽井沢でセミナーと懇親会（ゴルフコンペ含む）を協力会員（化研マテリアル株式会社）の保養所にて開催することができました。国内屈指の避暑地でもある軽井沢は、エアコンなしでもセミナーができるほど涼しく快適でした。

まず第1プログラムでは、協力会員の新商品などを各社5分でプレゼンしました。興味をひく新商品が多く、各メーカーの高い技術力を感じました。

第2プログラムは、CPD付きのセミナーとして、去年に引き続き東京工業大学名誉教授の和田章先生をお招きし、「熊本地震、地盤と建物、建築の強さ」というテーマで、正会員10名、協力会員14名が座談会形式で意見交換をしました。今年4月14日、16日と熊本県を襲った震度7という地震はまだ記憶に新しいところですが、建築物の外被に携わる我々Bグループメンバーには大変興味深いテーマだったと思います。1時間半の予定をオーバーし、建築の長寿命化を考える上での問題点など大変興味深いお話をいただきました。



東京工業大学名誉教授の和田章先生を迎えたセミナー

座談会の中で正会員の方から、建築の全般を楽しく学べるサイトの紹介があったのでご紹介しておきます。

㈳東京構造設計事務所協会が運営するウェブサイトで、「建築検定」というページです。1級～5級までのチャレンジ方式になっており、小学生から大人まで、外出先で気楽に挑戦できます。構造の重要性、構造の楽しさを知り、防災意識を高めることができます。

■「建築検定」http://www.asdo.jp/kentei/kentei.php

上記のように正会員、協力会員の皆様からも多くのご意見があり、有意義な座談会になったと思います。

第2プログラム終了後、和田先生も交えて中庭にてバーベキューパーティーで大いに飲食、カラオケでも盛り上がり、第1日目は無事終了しました。

2日目は懇親ゴルフを開催し、先日LPGA女子プロゴルフトーナメント「NEC軽井沢72ゴルフトーナメント」が開催された軽井沢72カントリークラブで、ゴルフコンペを楽しみました。優勝は那須様、準優勝は深滝様と正会員が1位、2位と好プレー続出の楽しいゴルフを満喫しました。

2日間にわたる盛り沢山のスケジュールで大いに軽井沢を堪能していただけたと思います。Bグループ恒例となった軽井沢セミナーですが、来年も多くの参加を募り、続けていきたいと考えています。

バーベキューパーティー

保存問題委員会

23地域会のタカラもの

保存問題委員会
副委員長
北村紀史

昨年度までの保存問題大会が、本年度は第1回JIA関東甲信越支部大会「建築祭2016群馬」に引き継がれ、保存問題委員会もシンポジウム等に関わりました。この中で保存問題委員会が準備・進行を担当し、6月10日に前橋元気プラザ21にぎわいホールで開催された、昨年度の保存問題東京大会で東京都内の各地域会に発表いただいたシンポジウム“14地域会の残したい環境”を踏襲した“23地域会発表会「ここにあるタカラもの」”について報告させていただきます。

昨年度の保存問題東京大会のシンポジウムで行った都内14地域会の発表会は、さまざまな背景をもつ地域会が一堂に会して、それぞれの視点や考え方を相互認識する場としての成果があった一方、時間的な制約もあり討議が深められなかった等の反省点もありました。本年度は関東甲信越支部の全地域会が対象となり、発表の視点も従来の保存問題にとどまらず、まちづくり、環境、災害対策へ広がることから、進行中もリアルタイムで各地域会発表ごとにキーワードを確認・記録・投影し参加者の間で問題意識を共有していきました。

■23地域会のキーワード

当日は18の地域会に発表いただきました。発表は関東甲信越を千葉から、地図上で反時計回りに隣り合う地域をつなぎながら進めていきました。また、発表を5地域程度にグルーピングして近隣相互での意見交換も行いました。

各地域会からさまざまな「タカラもの」を紹介いただきましたが、その場でピックアップしたキーワードを右に挙げさせていただきます。

各地域会の発表時間は5分に満たない限られた時間となりましたが、その中でさまざまな建築物や環境、また活動が紹介されました。発表後の意見交換の中では「価値を広めるにはどうしたらよいか、評価はどうあるべきか、地域間での共有・連携が必要ではないか」などの声が聞かれました。

●各地域会のタカラもの

千葉地域会	街づくり
茨城地域会	地域のヘリテージ
栃木地域会	大谷石、景観
群馬地域会	都市の記憶、まちづくり
新潟地域会	保存、景観、異色の建築家
長野地域会	地域材利用の活性化
山梨地域会	自然災害・戦災、歴史的建造物と再開発
神奈川地域会	三つの災害・復興・街づくり、生糸を通じた群馬との繋がり
三多摩地域会	人づくり／共感コミュニティ、まちづくり
新宿地域会	建築マップを通じた活動、保存・活用・オリンピックを目指して
杉並地域会	住宅都市のヘリテージ、未来に活かす
世田谷地域会	風景資産
千代田地域会	重層する各時代の景観、界隈
中野地域会	中古なのかヴィンテージなのか
文京地域会	タカラものの探し方と関わり方
港　地域会	遺すものと変えるもの、価値を上げる
目黒地域会	生きた活用、界隈
城南地域会	地域を知る冊子「城南散歩」を通じての活動

■発表会の今後

昨年の東京での地域会発表会は、発表内容や提示された意見を受けたその後の展開がなかったことも課題とされました。今回は、近接エリアでの問題の共有や、遠隔地相互での共通の主題の発見があり、今後の地域間の交流や連携の端緒となったのではないでしょうか。

今回はまちづくり、環境、災害対策まで幅広い分野が対象となるという周知が行われたものの「タカラもの」というタイトルから昨年の保存問題大会の「残したいもの」に通ずる保存関連の内容が多くを占めましたが、今後支部大会の枠組みでこの発表会が継続される場合、各委員会の協同を進めることで、より広い視点を収集し、多様な地域の魅力や課題を共有する場となることでしょう。

最後になりましたがこの場をお借りして発表いただいた各地域会の皆様、企画・運営いただいた支部大会実行委員会の皆様に改めてお礼を申し上げます。

23地域会発表会会場風景

JIAトーク実行委員会

2016年度
第1回JIAトークの報告

JIAトーク実行委員
高橋マサル

1976年より年4回、文化的な講演会企画の運営を行っているJIAトークは、創造的な活動や研究、新しい領域で活躍されている建築家以外の方々を講師にお招きして、建築家のみならず、一般の方にも相互交流の場として、日新工業株式会社の協賛を得て継続的な活動を行ってきています。

とりわけ昨年度からは、さまざまなジャンルで活躍されている第一線の方の講演ということで、個性的なトークの形式となるケースが多く、そのため、会場である建築家会館1階ホールで実現させるにはどのような準備が必要か、ポテンシャルをいかに引き出すか、また、会場の改善点は何か？などを委員会で活発に話し合い、建築家として、相応しい設えを検討・提案・実践しています。

さて、2016年度最初のJIAトークは、6月29日に、音楽家・小西康陽（やすはる）さんをお迎えして「公開ディスクジョッキー：わたくしの二十世紀、二十世紀の音楽」と題して行い、120名を超える方々が聴講されました。

会場にターンテーブル2台とミキサー、スピーカーを設え、ご持参いただいたレコード120枚ほどを、その場でかけながら、氏の個人史（今までどんなレコードを聴いて、どんなふうに育って、どのようにして音楽を始めて、どのように音楽を作るようになったのか）を語っていただきました。流れている音楽のレコードジャケットをプロジェクターでライヴ投影し、ヴィジュアルによる補完も行い、音楽とデザインの関連性も把握できるように趣向を凝らしました。こうして生まれたディスクジョッキー（DJ）＋トークという形式はラジオの公開収録さながらの場となりました。

氏が生まれた1959年の西洋のヒット曲、時を同じくして流行っていた全く別ジャンルの日本の流行歌を立て続けにかけ、時代背景の違いを感じさせるところから始まり、時間系列に沿って曲をかけながら語っていただきました。

レコードから流れる曲は、氏のターニングポイントとなる出会いの1曲の数々で、曲にまつわるエピソードが実に鮮明に記憶されていて、その時代にタイムトリップしたかのような臨場感にあふれ、同時に音楽へのこだわり・愛を感じました。

レコードをかけながらエピソードをお話しする音楽家・小西康陽氏（写真：蔵プロダクション）

子供の頃TVアニメで印象に残った曲、ラジオから流れてきて知った曲、初めて親にねだって買ってもらったレコード、初めて自分のお小遣いで買ったレコード、転校先の隣の席の友人から勧められた曲、家庭教師の大学生に教えてもらった曲やカルチャー、洋楽のTV番組で見た演奏中のセットデザインやダンサーの衣装の話、学園祭でバンドを組んでカヴァーした曲、音楽を作っていく人になろうと決心した曲、など、音楽とともにデザインやカルチャー、人、自我との出会いが、時に熱く時にユーモアを交えながら語られていきました。

そうした出会いを単発でとどめることなく、気になった曲の作詞者、作曲者、編曲者や、好きなアーティストがどんなレコードを聴いてきてどんなカルチャーに影響を受けてきたかなど、能動的に掘り下げていき、次々に世界を広げていき、やがてそれらが繋がり、個人史が趣味や個人性という枠組みを超えて超個人史として体系化されていくような、そんな二十世紀のカタログ音楽としてのレコードの素晴らしさを体験しました。

さまざまな出会いの中で趣味・個人性の深化軸と、客観的に物事を位置づける相対化軸の双方の感覚を持つことが重要なことなのだと気づかされました。

残念ながら時間がきてしまい、今回は幼少期〜中学、高校生の時代までの話で閉幕となりましたが、大学〜ピチカート・ファイヴとしてデビュー、現在に至るまでについては別の機会を検討中です。

多種多様なジャンルの講師陣からどのようなことを学び、咀嚼・編集し、自身のフィールドに持ち帰り、知的価値として生かしていくのか。これがJIAトークの醍醐味だと考えています。今後のJIAトークにもますます期待していただければと思います。

金曜の会

今年度の企画

部会長
日高敏郎

今年度は①6回連続講座と②木造建築の可能性をテーマとした企画を3回、③一般企画を2回、それから④恒例の8月神宮花火大会を楽しむ会の計12回を実施中です。以下概略を説明します。

①内藤廣氏「建築家内藤廣の6回連続講座」(奇数月全6回)

昨年の香山壽夫氏の6回連続講座に続く第2弾として、内藤廣氏の連続講座を計画し実施しています。これまでに5月「3.11を振り返って」、7月「建築とデザインについて」、そして9月「デザインについて」と3回行ってきました。初回の「3.11を振り返って」では、内藤氏が震災後多くの復興関連の委員会に参加した経験から得られた問題点を率直に語っていただき、復興における潜在的な問題点が浮き彫りになりました。これは氏が当時東京大学工学部土木工学科に在籍なさっており、建築と土木の両方の立場からより一層深い洞察が可能であったものと思います。

②木造建築の可能性をテーマとした企画

まず4月に東大名誉教授の安藤直人氏を講師として、「今、なぜ木造建築なのか／その可能性と課題を探る」と題して森林と木材と建築を繋ぐ、俯瞰的なお話をしていただきました。

引き続き、6月には東京大学生産研の腰原幹雄教授をお招きし、木造防耐火や高層建築の木造化(都市木造)への取り組みをレクチャーしていただきました。その中で、腰原氏が取り組んでいる現代の木造は伝統木造とは発生が異なっており、伝統木造の延長線上には無いとのお話を伺いました。

腰原幹雄氏のレクチャー

③一般企画

10月は皆川典久氏による東京スリバチ学会「凹凸地形が奏でる都市の魅力」を予定しています。関東ローム層が生んだ不思議な東京の地形を研究してこられた氏は、微妙な土地の上り下りをも見逃しません。建築の話と遠いですがブラタモリよろしくたっぷり楽しんでいただけると思います。

12月はシンポジウム「前川國男の現代における意味—没30周年を迎えて」を、青木淳氏、松隈洋氏、森まゆみ氏をお招きして行う予定です。なお11月、来年1月と3月は先述のとおり内藤廣氏の連続講座を行います。

④8月神宮花火大会を楽しむ会

今年は断続的に強い雨が降りましたが、花火の1時間位前にピタッと降り止み、大変きれいな花火を楽しむことができました。来年からオリンピックの終わるまで一次中止とのことで、金曜の会の花火観賞会もこの間お休みとなります。

関連の活動

これまで50を超える企画を行ってきましたが、なにやら初期の頃、どのような講演会を行ったのかが曖昧になっていることがわかり、今のうちに過去の企画を整理し今後につなげたいと考えています。本部と相談し建築家クラブの本棚に金曜の会用にコーナーをつくっていただきましたので、そこにDVDと各回のお招きした講師の主な図書を過去に遡って購入し保管していきたいと考え取り組み中です。DVDについては建築家クラブで視聴できるように方法を検討中です。もう少し形が整いましたらJIA会員の皆様や金曜の会に参加なさった方々に見ていただけるようにしたいと思います。

最後になりますが、『Bulletin』7月号の寄稿の中で金曜の会の求人をしましたが、最近になってようやく新しい仲間が増え、かなり機動力が増してきましたので、会の有り方をもっと議論し、金曜の会らしい企画を継続できればと思います。

デザイン部会

今、価値を持ちうる アート・建築表現のベクトル

デザイン部会長
山本想太郎

建築が芸術表現としての側面をもつことは言うまでもない。しかし多くの建築が生成される現場で、その芸術表現としての価値は極めて曖昧な扱いを受けているように思われる。その問題意識から、2013年に私が部会長に着任して以来、デザイン部会は「アート」と「建築」を同時に論じることによって建築デザインの輪郭を浮彫りにすることを研究活動の柱としてきた。

また近年、アートと建築がシームレスに並存するような事例が目立つようになってきたという背景もある。『○○トリエンナーレ』といったイベントに代表される非美術館型の現代アートの潮流は、建築を巻き込みながら大きく社会に浸透してきている。その基盤ともいえる1990年代から広がった「リレーショナル・アート」という概念は、制作プロセスに多くの状況文脈が介在するというものであり、建築デザインとも極めて親和性が高い。そこでそのようなアート、建築の当事者、研究者を招いてのシンポジウム・シリーズを開催した。それは『アート表現と建築表現』(曽我部昌史、尹熙倉、高浜利也、山本想太郎)、『あゝイタリア。でもなぜ日本人が？』(日本デザイン協会と共催。陣内秀信、大倉冨美雄)、『写真と建築』(鷹野隆大、小川重雄、山本想太郎)、『ウィリアム・モリスと現代』(日本デザイン協会と共催。川端康雄、大倉冨美雄)、『アートイベントと建築――大地の芸術祭 廃校プロジェクト』(北川フラム、豊田恒行、日置拓、山岸綾、山本想太郎)、といった多角的な検証となっている。

本年度のシンポジウム『まち＋アーチスト＋建築家』(本間純、伊藤嘉朗 、山本想太郎) では、実際に建築・都市とアートが渾然一体となるような制作活動を行っている3名が登壇した。話題の中心となったアートイベントは新潟県十日町市・津南町で開催されている『大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ』、神奈川県横浜市青葉区で開催されている『AOBA＋ART』で、いずれも登壇者全員が参加している。特に『大地の芸術祭』は世界最大級の有名アートイベントであり、このようなイベントが地域振興にもたらした成果から語られることはよくあるのだが、その一方で、アート表現に何をもたらしているかが語られることは少ないようにも思われる。登壇者からまず挙げられたのは、地域の強いコンテクストに影響されたアート群が、当初は鮮烈なインパクトを放ちながら、イベントが回を重ねていくにしたがって全体として「閉じた」印象になっていく問題点であった。そこで強度を保つものは従来の刺激や心地よさに頼った表現ではなく、地域の日常とともに「生きる」ことができるアートなのではないだろうか。その視点で、建築家である伊藤氏が毎年開催する自転車レース自体をアートとした『ツールド妻有』は非常に興味深い。また山本が設計する多くの、アート・リノベーション・プロジェクトでも、いかに表現に日常を取り込めるかが意識されている。

『AOBA＋ART』はアーチストの本間氏が創設メンバーでもある小さなアートイベントである。美しが丘という宅地開発エリアで、まちづくりという要素とアートという要素を微妙な力加減でバランスさせる難しさが語られた。シンポジウム全体から感じられたのは、アートも建築も、これらの状況下では明確に定位するような表現形式にはなりえない、なるべきではないということであった。その日常・非日常のゆらぐような曖昧さの中にこそアート、建築、都市への批評性がこめられることに自覚的な表現のみが、新しい表現として意味を持ちうるのでは、と最終的には示唆された。そしてこれこそが今、価値を持ちうるアート・建築表現のベクトルであるとも思われる。デザイン部会では継続してこのテーマを掘り下げていきたい。(文中敬称略)

シンポジウムは一般公開で、毎回約50～60名が聴講参加している

新潟地域会

新潟地域会の活動について

新潟地域会
代表
小川峰夫

新潟地域会は、正会員29名、法人協力会員17社計46名の小さな地域会です。毎年以下の4つの継続事業を核に活動しています。

1. 新潟県内大学卒業設計コンクール

今年度で19回目となります。新潟大学、新潟工科大学、長岡造形大学、新潟職業能力開発短期大学校の4つの大学の学生を対象に、各校最大5作品の展示と公開審査を行います。審査員は特別審査員と関東甲信越支部、近隣地域会からの計7名です。公開審査で選ばれた金賞作品は「JIA全国大学卒業設計コンクール」に出展されます。また、特別審査員はJIA新人賞受賞者にお願いすることが多く、公開審査会の合間に近作等のミニセミナーも開催しています。

2. JIA新潟クラブ建築セミナー

今年度で20回目となります。著名な建築家、ランドスケープアーキテクトを招くこのセミナーは、毎年150名を超える一般聴衆が参加して開かれます。地域会としては、一般市民を対象としたこのセミナーを、新潟におけるJIA広報の意味合いにおいても重要と考えています。

3. 学生課題設計コンクール 新潟県内発表会

今年度で12回目となります。県内の建築系教育機関(4大学、1専門学校、4工業高校)が参加し、各校住宅系5作品をプレゼンテーションします。公開審査では、JIAメンバー、教員、学生が全員参加し、各校2作品を選抜、さらに大学、高校の部で金銀銅賞を選びます。この発表会は、学外でのプレゼンテーション経験が少ない学生に修練の場を提供すること、参加学生に、県内の他の学校の学生・先生や建築家協会メンバーなど日常では意見を交わす機会が少ない人との交流の場を提供し、建築に対する向上心を高めることを目的としています。また、後日開催される、JIA 北関東甲信越学生課題設計コンクールに推薦する作品を選ぶ予選会としての役割も担っています。

大学卒業設計コンクール 公開審査風景（2016.3.13）

4. 北関東甲信越学生課題設計コンクール2016

今年度で11回目となります。北関東甲信越地域(6県)の建築系教育機関(大学、専門学校、工業高校)の学生を対象とし、各校住宅系2作品を展示して、大学・高校の部で金銀銅賞を選びます。審査は一般公開とし、特別審査員長、支部役員、地域会審査員が務めます。参加者が6県から集まりやすいということで前橋工科大学で開催しています。また数年前より関東甲信越支部事業となり、6県の地域会より選出の委員による実行委員会で運営しています。

第20回JIA新潟クラブ建築セミナーについて

誌面の都合もあり、今年度最初の事業となる建築セミナーについて少しご説明します。今年度は担当委員会の強い要望により新潟県出身の異端の建築家「渡邉洋治」を取り上げます。「いま、建築家・渡邉洋治を考える」と題し、渡邉がなぜ異端の建築家と呼ばれたのか、作品やドローイングが発する強烈な力の所以は何かを考え、今後現れることはないであろう希代の建築家・渡邉洋治をいま改めて見つめ直す機会とします。開催場所は糸魚川市善導寺客殿。氏の事実上の処女作であり、55年経った今なお地域に愛され使われ続けている建築です。講師は長谷川堯氏です。近隣の地域会にもご案内を差し上げますので、よろしくお願いします。

善導寺 1961年竣工 設計：渡邉洋治

中野地域会

ピンチをチャンスに ねばり強く

中野地域会
幹事
白江龍三

中野地域会では最近2つの残念な出来事があった。一つは中野区鷺宮にあった白井晟一氏設計の住宅が解体されてしまったこと。もう一つは、保存の要望を出していた中野サンプラザの解体が決まり、新たな計画が動き出したことだ。

解体された住宅は、昭和53年竣工の木造2階建て、延べ床面積240㎡の、白井晟一氏晩年の未発表作品である。この住宅のことを我々が知ったのは、既に売却が合意され、解体予定日も決まった後だった。売却の手続きが進む中、(一社)住宅遺産トラストにも声掛けし、共にギリギリまで保存の可能性をさぐろうと、中野たてもの応援団の建物調査に参加した。オーナーに会うことができ、売却が変えられないなら移築保存はどうかと提案し、オーナーも購入した不動産会社に話してみるとのことだったのだが、残念ながら解体されてしまった。

この住宅は晩年の作ということもあってか、予想をはるかに超えて素晴らしいものだった。独立した茶会が開催できる茶室があり、空間の融通性も高そうなので、さまざまな用途に転用できそうな建築で、小さな観光アイテムになり得る美的完成度もあったので、残念な結果だった。しかしギリギリまで我々が保存の可能性を探ったことに対してはオーナーも喜んでくれた。

今回の一件を通して、オーナーが保存運動への懸念を押して建物を公開した思いや、そのような懸念に配慮した慎重な新建築家技術者集団(見学会を別途主催)の活動など、建築の保存に対する関係者の複雑な思いに触れた。さまざまな調整を要する建築の保存には時間が必要で、それにはオーナーが安心して情報公開できる信頼関係が必要だが、その素地は整いつつあるように感じた。中野地域会としても、民間の案件でも成果を出せる活動をするため、心の準備ができたように思う。

白井晟一氏設計の未発表住宅

中野サンプラザについては、2014年8月にJIA関東甲信越支部長と同保存問題委員長、中野地域会代表の連名で「中野サンプラザ活用に関する要望書」を中野区長宛てに提出し、この林昌二氏の作品の活用を促していた。しかし行政が進める「中野駅周辺整備グランドデザイン」では、中野サンプラザは解体され、現区役所敷地と一体化して大規模集客施設と業務、商業などの複合施設が作られることになっていた。そして本年5月には、この方針を変えないことが確認され、民間事業協力者の募集が開始された。この時点で、サンプラザの保存はできないことになった。サンプラザを保存しない前提であれば、行政の基本的方向は概ね妥当だと思われるが、これに先立って実施された事業パートナーの募集で選定された2グループの計画案は、どちらも四角い高層ビルと広場で構成されるもので、おたく文化の拠点として世界に知られた中野を象徴するようには思えない。これを受けて中野地域会では中野区の担当者と面談し、現行の計画案は2案とも短期的な経済原理には整合していると思われるものの、文化的要素が欠落している旨表明して意見交換を行った。これには区の担当者からも共感を得ることができ、対話の糸口が開けたように思う。建築の保存もまちづくりも、正論を表明しつつも大きな社会の流れから遊離しない範囲で最大の成果を得る努力が必要だ。日頃から建築家が安心できるパートナーだと知ってもらうとともに、機会をとらえて少しでも魅力的な中野の未来に貢献するべく活動していく方針だ。

高層ビル案ではない駅前開発の可能性イメージ

第三者性という文化
—CABE 導入と日本—

建築まちづくり委員会
JIA 名誉会員
長島孝一

CABEを日本に導入する意義について考えてみたい。西洋近代社会特有の文化と明治維新以来変貌しつつある日本社会の文化の違いの中で、“第三者性”を社会的意思決定行為として導入するという課題についてである。

CABE(Commission for Architecture and the Build Environment =建築・まちづくり推進機構)は、建築と人工環境のプロジェクトに対して、第三者の建築・都市設計・都市計画や関連領域の専門家集団が公正に評価し提言するシステムである。プロがプロを評価し提言する、いわば公式のセカンド・オピニオン獲得の仕組みだ。プロ仲間の忌憚のない意見交換を通じ、しかも公正な社会的価値観に立脚して、客観的で合理性ある判断を(地域)社会に提示するのである。

ちなみにCABEの文化的内容の並行事例として、英国の教育分野での第三者介入の例を紹介しよう。最近ウェールズ滞在中、地元公立小学校に招待されて戦争体験を語らされた。祖父母世代の戦争体験と同世代の敵方の体験を並行して聴き、生徒自身が第三者的立場で戦争の意味を考える授業だった。また、近く3年ぶりに視学官(inspector of education 教員ないし教育経験者)が来校し、前回提言のフィードバック、現行カリキュラムの内容、教師の質、生徒の質について提出資料と面接懇談を含め、第三者評価と提言・指導を受ける予定だった。教育制度の中で公的第三者による評価と改善の方式である。

思うに産業革命以来、社会・経済の近代化が最も早く成就したイギリスでは、伝統的階級間の差別、新たに発生した資本家と労働者の争いなどが相乗して、社会・経済分野に深刻な利害衝突と無数の不都合な事態が発生した。そこで市民社会の健全な運営のため、客観的、合理的に調整する仕組みとして、公平な第三者の介入が必然だったと思われる。

その背景には、数世紀にわたる英帝国植民地経営の中で搾取収奪行為を第三者の掣肘なしに公然と行ってきた経緯がある。この汚点を自前の反面教師とし、フランス革命以来の近代ヨーロッパ市民社会の原理(友愛・自由・平等)を自国内では型通り実現する方式として、第三者性の担保を市民社会運営システムの中に構築したと言えるかもしれない[註1]。

翻って最近の日本を見ると、いわゆる“原子力ムラ”の判断の客観的妥当性が疑問視され、新国立競技場の立地・規模の立案から設計者選定に至るまでの納得いく処置を欠いた“スポーツ・ムラ”の問題が明らかになった。

どちらのケースも、日本社会の中の特定のミッションに関わる“ムラ”の営みの中で、客観的で中立な専門家集団・第三者機関による審議、提言と判断の欠如が原因となっている。第三者性を標榜する審議会や有識者会議もしばしば実質を伴わず行政の隠れ蓑となっているなど、類似現象が日本社会の本格的近代化を阻んでいると思える。

どうしてこのような不都合が多発するのか。おそらくこの現象は日本が西洋的近代化の道を選んだ明治維新以来の新規現象だろう。社会人類学者中根千枝が『タテ社会の人間関係』の中で言うように、“社会組織”は(容易に)変わっても、“社会構造”は(容易に)変わらないのである[註2]。

江戸時代260年の鎖国の中では時間はゆったり流れており、静態的・農本的封建社会の小さな共同体では、時間をかけてとことん話し合い合意に達する談合方式が一般的で有効だったろう。社会運営上の意思決定には究極の“談合文化”が存在し、それ故に江戸社会は破綻少なく持続したのだろう。ところが明治維新以来、異質な文化的内容を持つ西洋的近代文明に急激な適応を強いられた日本社会は、談合文化の崩壊を見守るしかなかったのではないか。

ちなみにイザヤ・ベンダサンによると、ユダヤ社会では1票の反対もない議決は無効とされたが、これと日本社会の価値観とは根本的に異質である。しかし、西洋的近代化・グローバル化に翻弄されている現代日本では、片や伝統的な談合は破綻するか泥にまみれ、片や合理的な第三者裁定のシステムも確立されず、中途半端で非生成的な状態が生まれているのだ。

結論としては、日本社会が現代のさまざまな社会経済上の不都合を克服し、より高次な社会の生成を期すなら、公正な第三者の存在を尊重する文化の育成に志し、社会経済運営の末端まで第三者性を介在させる方策が必要があろう。CABEは“建築・まちづくり”分野におけるいわば先駆者として、さまざまな場面で第三者介在の有効性を実績で示すべきだろう。

註1 “友愛”はキリスト教的理想の博愛ではなく、同階級・同国民・同民族に適用する限定的“愛”の形態
註2 カッコ内筆者挿入

支部広報誌『Bulletin』原稿募集　広報からのお知らせ

■ 海外レポート（自薦、推薦）

海外レポートは海外で活躍されている方から、その国の建築に関わることについて紹介しています。海外との交流や国際会議、見本市などの参加報告でも結構です。自薦、推薦どちらでも構いません。ぜひ編集部へご連絡ください。

① 文字数　2,500文字程度（2頁）
② 写真、図版　2～3点程度（JPEG形式）
③ 執筆者の顔写真（JPEG形式／白黒での掲載になります）
④ タイトル
⑤ 図版キャプション
⑥ お名前、事務所名、電話番号、E-mail

■ 他人の流儀（推薦や話を聞きたい人）

連載中の「覗いてみました他人の流儀」に対しての意見を募集しています。この人に聞いてほしいという実名でもかまいません。老若男女を問わず、どんな業種でもアタックしたいと思います。ご意見を編集部へお寄せください。

① インタビューをしてほしい方の実名
② インタビューをしてほしい方の業種や分野など

■ 募集コーナー（会員に向けての告知や募集など）

巻末に会員の意見を掲載する「声」のコーナーを不定期に設けています。建築に関すること、JIA のこと、告知や募集など、どんなことでも構いません。皆様の自由なご意見をお寄せください！

① 文字数　500 文字程度まで（1／4～1／2頁ほど）
※掲載の可否、掲載の時期は、広報委員会に一任願います。

■ ひといき（投稿）

巻末に、建築・美術・音楽・本・旅・映画など、さまざまな話題をコラムでご紹介しています。
硬派な論評でも結構ですが、タイトル通りの気軽な感想も大歓迎です。会員の皆様からの投稿をお待ちしております。

① タイトル、サブタイトル、見出し、クレジット等部分100文字以内
② 本文、400文字以内（テキスト形式）
③ 記事に関する写真を1～2点（JPEG形式）
※なお、執筆者の顔写真は掲載しません。

■ 部会活動報告、地域会だより

部会と地域会の記事を随時募集しています。「地域会だより」は毎号2つの地域会に順番で原稿をお願いしていますが、部会はこちらからお声かけをしていません。部会、地域会ともに、興味深い活動報告などがありましたら、ぜひ編集部へご連絡ください。

① 文字数　1,200～1,800文字程度（1頁）
② 写真や図版1～2点（JPEG形式）
※掲載時期は広報委員会に一任願います。

投稿申し込み・お問い合わせ先

JIA 関東甲信越支部事務局　大西
E-mail：mohnishi@jia.or.jp
TEL：03-3408-8291　FAX：03-3408-8294

食欲の秋！得意な料理は？自慢の料理は？　編集後記

■このところ「たまご」焼き系に凝っている。プレーンオムレツ、オムライス、キッシュから何と言っても出汁巻き……。しかし良い道具は、自分は名人！と誤解してしまう。今日もシェフを気取ってパンを振る。（高橋）

■餃子、焼売…と挽肉料理が得意な私、何か案を練ることが好きなのかな？ストレス発散を兼ね挽き肉をこねてるのかな？そういえば、最近、挽肉料理が多いのは、さてどちらで？（浦）

■野菜炒めとチャーハン、我が家では山登りとキャンプ時の料理担当となっています。（長澤）

■私の最も苦手とする「料理」。キッチンでの仕事はヤカンでお湯を沸かすのみ。（上原）

■極力素材に手を加えない料理が好き。新鮮な野菜サラダ、肉、魚なら塩で焼くだけ。でも、昔は違ったような……。食べる人の好みに合わせて、得意料理は変わるものですね。（清水）

■料理づくりは簡単なものばかり、カレーやパスタくらいでしょうか。少しずつ、レパートリーを増やしていこうと思いつつ、なかなか増えません……。（八田）

BACKYARD

編集　：公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長　：高橋隆博
副委員長：八田雅章
委員　：小山将史・長澤　徹・中山　薫・上原和彦・吉田　満
清水裕子・浦　絵美
編集長　：八田雅章
副編集長：長澤　徹
編集ワーキングメンバー：倉島和弥・市村宏文・立石博巳・小山将史
中山　薫・浦　絵美
編集・制作：南風舎

Bulletin 266　2016. 11
発行日：平成28年10月15日
発行人：浅尾 悦子
発行所：公益社団法人 日本建築家協会　関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel：03-3408-8291㈹　Fax：03-3408-8294
印刷：株式会社 協進印刷

■JIA関東甲信越支部関連サイト一覧
・（公社）日本建築家協会（JIA）　http://www.jia.or.jp/
・建築家 online（一般向け）　http://www.jia-kanto.org/
・JIA関東甲信越支部（会員向け）　http://www.jia-kanto.org/members/

■ 定価 300円＋税／会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2016

100年クリーン

水のチカラで、ずっと輝く
AQUA CERAMIC

クリーン① トイレの汚れが、ツルンっと落ちる。
クリーン② リング状の黒ずみ、くすみとサヨナラ。
クリーン③ 新品時のツルツルが、100年つづく。※

LIXIL主力住宅トイレのすべてに「アクアセラミック」を展開

※ 同一部位の摩擦回数2往復で年間365日お掃除した場合。お掃除ブラシで約7万回（100年相当）の往復を想定しています。

株式会社 LIXIL　お客さま相談センター　0120-179-400　受付時間：平日 9:00〜18:00　土・日・祝日 9:00〜17:00